

浄土

五月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別供承郵便第三五二号)
昭和三十九年四月二十五日 印刷 昭和三十九年五月一日発行

第三十卷 第五号

法然上人が現代においてになったら「選択本願念仏集」
をこのようにおとさになるであろう 念仏信仰の真髓を
明らかにした全浄土宗徒必読の書

選 擇 集 私 解

大正大学教授 文博 竹中 信常 著

▷ 目 次 ◁

宗祖と共に
やすらげき旅路
念仏にすけささぬ
特急「ごくらく」号
砂糖と塩
いつでもどこでも
ふり仰ぐ山の高さ
浄土への道
借金と念仏
サシミ念仏
一に一たす二
偏依法然
あとがき

新書版 一〇〇頁
定価 一〇〇円
送料 三〇円

発行人 法然上人鑽仰会
発行所 大 道 社

香 り た か き 浄 土 ト ラ ク ト

真理のはなたば	大正大学教授 佐藤 良智 著	新書版 価 70円 20円
日常勤行式の解説	大正大幹事 村瀬 秀雄 著	新書版 価 100円 90 P 20円
信仰への導き	大正大学教授 佐藤 賢順 著	B 6 判 価 15円 16 P 10円
①月影抄 ②葵ぐさ	大正大幹事 村瀬 秀雄 著	B 6 版 各冊 価 15円 16 P 10円
浄土宗のおしえ	大正教授 宮林 昭彦 著	新書版 価 25円 20 P 10円

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に (多数申込みには)
真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に (割引いたします)

発行所 法 然 上 人 鑽 仰 会

電話 (262) 5944
振替 東京 82187



およそ五種の嘉譽をつたへ、二尊
の影護をかうむる。これはこれ現益
なり。また浄土に往生して、乃至成
仏す。これは是当益なり。

法然上人御法語

— 目 次 —

表紙 仏 頭

随 想	村瀬秀雄・樫村春子・上田純明	(2)
生き死にともにわずらいなし	伊 藤 宏 天	(4)
葵祭とホトトギス	榊 泰 純	(8)
続三部経の再発見(1)	須 藤 隆 仙	(18)

東南アジア旅行記	佐 藤 行 信	(12)
近世文名録 原田霊道先生	高 橋 良 和	(16)
茶の湯に生きた人々 田能村竹田	林 左 馬 衛	(24)

紹 介 今野円輔著「現代の迷信」		(23)
御法語をいただく		(32)
浄土の動き		(22)
表紙の解説		(21)

中国浄土教物語 往生した人々	牧 田 諦 亮	(26)
----------------	---------	------

護国愛理の精神

村瀬 秀雄

(大東淑徳学園)

先般は交番を襲って巡査から拳銃を威しとろうとした少年があった。落語を地でいったような話なので一種の滑けいさがあった。それが今度は日本のよき理解者として親愛されているライシャワー米国大使を刺した少年があった。国を挙げての大騒動となった。この少年がいかに精神異常者であっても、われわれの住む世界の外の出来事でない筈である。こうした事態を惹起した責任はわれわれが負わなくてはならない。逆にいうなら日本の容易ならざる欠陥を暴露したに外ならない。

文部省が教育要領を改正して道德教育の充実ははかると、待っていたとばかりに日教組が反対をする。人類の滅亡を意味する原爆は当然禁止さるべきものであるのに、特定国の原爆だけは許されてよいと主張する。こうした現代の撞着を挙げるとなると際限がない。矛盾が矛盾を呼ぶような今の世相は、日本の

ひとこと

桧村 春子

(NHK放送担当)

急がば廻れ、急ぎは電車というわけで、この頃の交通事情では、クルマに乗って、かえって時間がかかるという現象はしばしばだが、それでも何でも、やっぱりあたふたとタクシーを拾う私だ。

その日は土曜だったし、折柄バラバラと小雨も降り出して、駅前停車場はクルマを待つ人が行列だった。スタジオ入りの時間も迫るし、次第にイライラしてきた時、何台目かがやっと私の前に止った。と、ドアがあいて、「お待ちせしました。どうぞ！」という思いがけない挨拶だ。しかし私はいつもの調子で「田村町、NHK！」と事務的に告げて乗りこんだ。大いに気が立っていたから、恐らく顔の表情もかわしかったと思う。それでも運転手君の言葉は相変わらず丁寧だ。

「ハイ！かしこまりました」

少しずつ気持が落着くにしたがって、私は

美しき生涯

上田 純明

(芝学園教諭)

晴れた空は美しい。美しい雲は私を救ってくれるとヘッセも言った。日本語の「うつくし」ということばは、古語で「いづくし」で、三つの内容を持っていた。①「慈しむ」——慈愛の世界。②「厳しき」——厳肅(きびしさ)の世界。③「斎きまつる」——神の前に立つ心の世界(聖なる世界)。私は、いつもこれをくりかえし味わい、心の糧としている。冷たい心には美は生れぬ、たるんだ生活は俗臭の汚れが目をもそむかせるばかり。今日も祈る。祈りつつ夕餉をすまして、また明日を祈る。そこに美しきものがただようのです。

今年もまた新学年から私は、源氏物語を講義する。楽しみの一つです。美しい流れの感覚を失っては源氏の映像は破壊されると今日出海氏も言っている。美しいものは「憧れ」から出発する。光源氏という人間の生涯は、三才にして先立たれた母(桐壺更衣)への憧

中心を貫く筋がない点に起因する。

妖怪学で有名な井上円了博士は「仏教活論序論」(明治二十年刊行)の開巻劈頭に次のようにいつている。

「人誰レカ生レテ国家ヲ思ハサルモノアラシヤ 人誰レカ学ンテ真理ヲ愛セサルモノアラシヤ 余ヤ鄙賤ニ生レ草莽ニ長シ 加フルニ菲才浅学ナルモ亦敢テ護国愛理ノ一端ヲ有セサルモノニアラズ 朝雨暮風ニ接スル毎ニ未タ嘗テ護国ノ情ヲ動ササルハナク 春花秋月ニ遇フ毎ニ末タ嘗テ愛理ノ念ヲ発セサルハナシ此情此念相結ンテ余カ一片ノ丹心トナル」

しかし井上博士の護国愛理の精神は単なる国家主義ではなかった。あくまで自分の国を中心に考え、これを世界に拡めて十分な批判を受けようとする外向きの考えであった。だから仏教こそ世界に拡まるべき宗教であるから、まず以て日本の全国民が真に仏教を知らねばならぬと主張した。

今日の指導者、識者たちが外国の風潮、動向に追隨するに夜も日もないという植民地根情とは本質的に相違する考え方であった。

こういう言葉を、久しく聞いていなかった事に気がついた。ボタン!! プー——ボタン!! あたかもそれは荷物の如く運ばれ、おろされる味気なさに、いつかすっかり馴らされてきた私達は、クルマの乗り降りにも、しかるべき挨拶があったことを忘れていたのだ。

袖ふれあうも他生の縁とやら、ものの十分二十分にしろ、ひととき同乗していく二人が、敵同志のようににらみあっている事はない。物柔かな運転手君の応接に私の心もいづかなごみ、「どうも ありがとう」と素直に感謝の言葉を返して、その車を降りた。

沈黙がいつも金とは限らない。何でもないちよつとした一言が この世の中をどんなになごやかにしてくれるか、改めて私は感じさせられたのだった。

日本人は人情に厚い筈なのに、礼儀を重んじる国民の筈なのに、案外ことばの出し惜しみから、誤解されている場合が多いのではないだろうか。

たった一言でも、どうか生かして使い度いものだ。

憬が、母性の幻を追うて行く淋しい心の遍歴です。光源氏が十二才で藤壺を想うたのも母に生き写しだったからです。紫の上を心の妻に上げるまでいとおしんだのも母の面影を持っていたからです。晩年に女三の宮を迎えることになったが、やはり藤壺の姪で、似ていたことが最大の理由です。ところで、重要なことは、既に須磨、明石の巻あたりから、時折り西の空を仰いで仏を念じたり、誦經をしたりして淋しさの涙を、そちらの方へ向ける生活が、のぞきはじめたことです。所詮地上では母に遭うよすがもない、み仏を念じてはかなきもののあわれを悟り切るには、またあまりにこの世の男女の仲らいの上に流れる情緒の美しさが恋しい。しかもそれはまたしてもはかない。斯くして愛と罪の意識と死と自然とを背景として、ある時は道德的対決となり、ある時は信仰に導かるる過程ともなり人間が、心のやすらぎを求めるには、どうしたらよいのかと教えてくれているようです。古典というものは美しく現代に蘇えるものということはたしかです。

生き死にともにあらずらいなし

伊 藤 宏 天

(大樹寺住職)



本誌の読者には、話が少し、幼稚すぎるかも知れませんが、浄土の教えを伝え、念仏を一途に行ぜしむるための法要に、五重相伝(結縁五重とか化他五重とかいう)というのがあります。私の大樹寺(三河の岡崎市)がその根本道場であると一般に取り扱われております。いま現に、各地各寺、機縁に応じて、盛んに行われていますが、かつてその五重相伝を受けられたお方にその所感を聞いたことがあります。

「いかがでしたか」

「はい結構でございました。なんどき死んでも良いと気づかせていただきました」

「なるほど良いことをなさいましたね。なおそれから?」

「もう、それだけでございます」

「でしうか。そのあとが大事だと思うのですが?」

「と、おっしゃいますと?」

「おわかりになれませんでしたか。おっしゃるとおり、なんどき死んでも大丈夫、いきの切れたのが終りでもなければ、動けなくなったのが最後でもない。未来永遠の大生命、無量寿の国に生きるのだとの大安心が決定したとおよろこび、それは大へん結構なことでございますが、だから、どうなれば良いのでしょうか?」

「何のことか、よくわかりませんが」

「未来の安心は立派にできたから、死ぬのは怖くないとおっしゃるのでしょうか?」

「そうでございます」

「だから、最後のひといきで、よしあしともに仰せのまま
と、何ごとにつけても、いとまめやかに、ご用あいつとめば
やと、ご決心がつきましたかと、おたずねしているのでござ
いますか、いかがでしたか」

漸く質問の意味がわかったらしく、やや暫らく考えておら
れましたが、

「そういう気には、なれませんでした」

と、はっきり、大胆に、正直に答えられました。

説きかたが不充分だったのか、聞くほうの側の力のいれど
ころが悪かったのか、最初におことわりしたように、誌友の
皆さんには、至って幼稚なことかも知れませんが、私たち布
教師に取っては、これが大問題で、今なお常に直面して、時
には煮え湯を吞まされるような目に会うことすらあるので
す。今このお話だって、「そういう気にはなれませんでした
た」と、布教師は、はっきり、背負い投げを食わされておる
のです。

これは私の常の持論ですが、宗教に課せられた問題が二点
あるとして、一には死の恐怖を除き、二には生の歡喜を与
う、といたします。単に私の主張というより、宗教の正解だ
と思うのですが如何でしょうか。或は人生の二問題、即ち生
と死とに取り組んで対決する宗教の課題とでも申しましょ

か。

法然上人はこれについて、

生き死にともにわずらいなし

と簡明に云い切っておられますのに、世間では往往にしてど
ころではなく、常にと云いたいくらい、今以てなお宗教を
(殊に仏教を) 死の一面だけに結びつけ、生の方面から遠ざ
けられがちなのを悲しく存じます。

ご承知のように、平安末期の世相は、やむなく厭生思想に
拍車をかけて、未来死後の浄土に絶對的な望みを托するよう
になり、それがまた鎌倉期に入っても、浄土教の一面に、そ
うした思想の流れ入っていることが、否み難い事実であると
しても、数々の法然上人のお言葉を見るにつけ、現世の生活
指導を全然無視されていないことがハッキリしているのに、
今日なせ斯うまで強く、生の方面から遠ざけられ続けている
のであろうか。

筆頭の「生き死にともにわずらいなし」を始めとして、

「現世のすぐべきようは念仏の申されん方によりて云々」に
しても、「余事をしながら念仏すとは思ふべからず」にして
も、いよいよ最後の「ただ一向に念仏すべし」に至るまで、
みな生の面にチャンとつながりがついているのに、どうして
お念仏が死の面にだけ受けとられ、また用いられるのでしょ

うか。いま戦陣にのぞまんとする甘粕太郎忠綱に対するご指導にしても、播州高砂の浜における漁士夫妻へのご説法にしても、室の宿場の遊女のご教化にしても、堂々たる生活指導だと、有難く拝読しておりますのに、一般多くの世人に、どうしてもこれがわかっていただけないのでしょうか。

惟うになどと、改まってひらき直るまでもなく、江戸幕府の仏教政策にわざわざいされたことは大きいですが、それは百年前までのこと、今以て、一たい誰への義理だてなのでしょう。もう気がねも遠慮もいらぬ筈なのに。さりとは、余りにも不甲斐ない姿に、時に腹立たしくも感じます。

「生き死にともにわずらいなし」

数あるご法語の中から、特にこのご法語を抜きだして、最後の私は、各地にご法縁を得てくり返しております。勿論、この語の前に、今様式につづられた有名な、

生けらば念仏の功つもり

死なば浄土にまいりなん

とてもかくても此の身には

思いわずらう事ぞなし

と、思いさだめぬれば」とありまして、『生き死にともにわずらいなし』と、決定判を捺された格巧にいただいて説いているのであります。

字句において「生死」と順序するのが妥当でしょう。時に「死生巖頭に立って」とも云われるが、これとても、死をめぐらして生に帰せしめんとするものであり、輪廻生死といい生死解脱といい、生れたものが死ぬのであり、どうしても「生」の方が元であります。

そこで私の常の主張にうつるのですが、

「死んだら何うなる、どこへ行く」

もし、それが気にかかるなら、それより先に

「どこから何をしに生れて来たか」

を調べなさいというのです。前後をまちがえているから、いつまで経っても、ハッキリした答が出ず、何返でも心配して、未来がどうの後生がどうのと同じことばかり繰り返している。お寺まいりの常連には進歩がない。万年一年生、わろく云われて腹が立つなら、少しは考え直して下さいと申上る。

「私共は一体、どこから何をしに来たか」

私はこれを使命の自覚といいます。

「捨此往彼、死して無量寿の国に、往き生きる」私はこれを人生の帰趣と扱っています。法然上人は「法然本地身大勢至菩薩」と使命を自覚され「念仏の興行は愚老一期の勸化なり」と使命を果遂され、生きの身の尊とさと喜びとを十二分

に味い尽されて、建暦二年正月二十五日「われもと極楽にいたりし身なれば定んで帰りゆくべし」の文字どおり、また身を以て人生の帰趣を明示されたのであります。

使命の自覚と人生の帰趣、首尾具足すると共に順序また正しく、あくまで、生がはじまりで死はおわりであります。

朝に道を聞き夕に死すとも可なり、ともいわれ、よく生きてこそよく死ねるのであって、よく生きた者にとって、すでに死は問題ではなくて、「真に生きる者、永遠に生く」で、これが往生浄土の姿であって、口常に南無阿弥陀仏するところに、

生き死にともにわづらいなし

の実証を得るのであります。

私は布教師の一員として、現に実行しているのですが、高座に登ったとき、演壇に立ったとき、聴衆の年令が高かろうと低かろうとおかまいなし、念仏中心の生活指導以外、絶対に話したことがないのです。これが布教師としての、せめてもの良心だと思ひこんでおります。時としては、討ち死にに等しい場合がありますが、頑ばり続けております。

かつて某地域巡教の砌り、大いに得意になって「念仏中心の生活指導」をやっておりますと、終りのほう三日間会場、ついで廻られた老婆があり、熱心な聴聞ぶりに、聊か感

謝の意を表しておったほどであります。最終のお別れに臨んでの挨拶に

「今日で三日間、おともをしてご高説を聞かせていただき、今日は、今日は、と耳を傾けてお待ちしております。遂に一度も宗教をお説き下されず、毎日、世間はなばかりお繰り返してございました。私共としよりは此の世に望みはございません。後生をお聞かせいただきこうと、ご巡教をお待ち申し上げおともをさせていただきましたのに、まことに残念に存じます。この度は、今日ぎりのご縁でございますが、重ねてご巡教の際には、どうぞ私共のために後生をお説き下さいますように」

パンを求めて石を与えられたという格巧らしい。受けとり方が、余りにも極端なので、即答をいたしかねましたが、教壇の周囲に、こうしたことが温存されていて良いものか。いま乏しい紙面を割いて、その罪が、説聴いずれの側にあるかを正そうとしているではありません。

願うところは、ひと時も速かに、教団の内外から、こうしたあいまいな空気を一掃して、大法然の逞ましい念仏信仰に立脚した、健全な生活態度を確立してほしいのであります。

「生き死にともにわづらいなし」とくしんの行くまで、何返でも、この自信に充ちた尊とい祖語に親しんで下さい。

葵祭とホトトギス

榊 泰 純

(大正大学助手)

今年も五月十五日(旧四月四日)に、京都では賀茂神社の

葵祭が行われます。全国からばかりでなく、日本に居る外国人、または外国からの日本観光団が、大勢京都にやって来ることでしょう。この祭は、日本の祭礼の中でも、世界中に知られているものの一つです。これは、皆さんもご存知のことと思います。残念ながら、わたしは実際に観たことがないのです。現在の葵祭については、皆さんのほうが詳しいと存じますし、わたしには何も云う資格はないのです。

しかし、幸いに、わたしは古い文学作品を読むことに恵まれて居ります。そこで、古い時代のものについて、少しおしやべりをしてみようと思います。

平安時代の中頃、ご存知の通り摂関政治のはなやかな時、

一人の女性が居りました。

彼女は感覚的な面では、当時の人たちの中でも注目されて居りました。彼女の父は、和歌をよくし、また漢籍にも詳しい人でした。当時の女性は「古今集」を空んじ、書に巧みであり、男女のかけひきにも、それぞれ優れていなければならなかったのです。しかし、彼女は、それらをマスターし、その他、家の学問である漢学にも通曉していたのです。そのために、彼女は、時の中宮にお仕えして居りました時にも、他の女房たちに混って、少しもひけをとりませんでした。

このような彼女の眼に、現在まで続いている葵祭及びその情景が、当時、如何にうつったでしうか。彼女の書き残した文章から窺ってみることにしましょう。

四月の賀茂の祭の頃は、なかなか情趣深いものです。上達部や殿上人の着ている着物は、濃淡の差があるだけで、生絹の下襷は、皆同じような装束で、本当に涼しそうに見えてよいものです。着物ばかりでなく、木々の葉もこんもりと茂ってはならず、若々しい新緑一色になり、春の霞も秋の霧もかからない、澄みきった空の景色は、何とも云えません。その上、すこし曇っている夕方や夜などに、小さな声でホトトギスが鳴いています。それも、遠くで聞き違いではないかと耳を疑うほどかすかであれば、まったく何とも云いようのない気持がいたします。

この彼女の感覚は、今のきらびやかな、古を回想するような感情とは違って、生活の中に入ってしまったている。賀茂の祭の日の、上流階級の人々や中程の貴族たちの粧いなどを端的に表現しているものなのです。一人の女性の感覚を刺激した景色でしかすぎませんが、これはただこの一人の女性の眼に映ったものだとはばかりは云えないと思います。木々の若芽のあざやかな新緑、それにまけないほど明るい装束の色々、澄んだ青空。如何にも色彩は初夏を感じさせるものばかりです。そんな時、耳に入るか入らないか程のかすかなホトトギスの鳴き声は、王朝人ばかりでなく、古典を読むわたしたちにも、のどかな感じを与えるのです。

京都をご存知の方はご想像いただけるとと思いますが、現在でも下賀茂神社のあたりは、多くの木々におおわれ、賀茂川の流れにさえぎられて、京の町々とは区分されて静かな一角をなしています。それが千年ばかり以前の京なのです。現在のように電車の音も、人々のせわしい音もありません。まして機械の音はありません。大きな音と云ったら、せいぜい牛車のわだちの音ばかりでしょう。信仰心のあつかった当時の人々が、祭礼の当日、しずしずと進む行列に眼が注がれると同時に、貴人たちと着物の色彩を見て、ああ、もう初夏だな、ということを知るのです。それにホトトギスも鳴いているのです。眼を通し、また耳に感じることによって、季節を肌を感じているのです。

この下賀茂に行く途中は、現在は町中を通って行くわけですが、この当時は、びっしりとつまった家並などはありません。彼女は次のように描写しています。

賀茂神社へ参詣の途中に、田植えををするというので、女どもが新しい折敷みたいなものを笠に冠って、おおぜい連れだつて唄っています。折れかがむような恰好で、何を云っていてもわからないながら、後ずさりして行きます。おもしろいことだと思つて眺めているうちに、ホトトギスを口汚くのしっていることがわかつて、聞くにたえない感じがしまし

た。働いている人たちは「ほととぎす。おれ。かやつよ。おれ鳴きてこそ、われは田植うれ（ホトトギス、てまえ、あいつよ。てまえが鳴くもんでな、おれは田を植えるんだ）」と唄っているのです。昔の人も「ほととぎすいたくな鳴きそなが声を五の玉にあへぬくまでに」とホトトギスを愛して歌を詠んでいるではありませんか。ホトトギスがウグイスより劣ると云う人は、何と云っても癪にさわって好感がもてません。

この女性は、鸚鵡とかクイナ・シギ・ミヤコ鳥などと共に、ホトトギスを鳥の中でもすばらしいものとしてあつかっているのです。それに、古今集の「けさきなきいまだ旅なるほととぎすはな橋に宿はからなむ」の歌や、新古今集にある「なく声をえやはしのばぬほととぎすさく卵の花の陰にかくれて」の人麿の歌などにあるのと同じように、橋が、葉はあおあおとしていると



ころに、花が真白に咲いているものを風情があり、おもしろいと感じており、そこにホトトギスが鳴いているのは縁が深いものであるとして、大変に好ましく覚えているのですから、ただ田園風景がのどかに写されているというだけではありません。ホトトギスは、この風景になくてもならないものなのです。ここにも眼に入る色彩ばかりでなく、耳を気持よく感じさせるホトトギスの声がなければ、彼女には賀茂の祭の風物にはつながらないのです。

このように、賀茂の祭には葵ばかりでなく、ホトトギスの鳴き声が是非とも必要であったこの女性は、祭に関係なく、ホトトギスの声をわざわざ京の中心地から尋ねて行っているのです。それは、ある年の五月です。

一日から、ずっと雨もよいで、曇った天候が続いています。彼女は「退屈だから、ほととぎすの声を聞きに行きたいわね」と云い出しましたところ、他の女房たちがわれもわれもと参加を申し出たのです。賀茂の奥に、何やら崎という織女の渡る橋の名によく似た風流な地名のうわさを聞いていたのです。「その辺に、ほととぎすが鳴くのよ」と云う女房がいるかと思えば、「それはきっとひぐらしなんだわ」と否定する女房もいるのです。そこで五日の朝、女房たちが車に乗って、その声を探ねて行きました、と云うのです。

この女性の並々ならぬ、ホトトギスに対する執着と同時に、この当時の上流階級の女性たちが、ホトトギスの声を聞くことに、如何に真剣であったかがわかる話でもあるのです。それに、注意していただきたいのは、どこのホトトギスでもよいのですが、賀茂神社の奥のホトトギスであるという点です。

如何でしょうか。その頃の宮廷に仕えていた女房たちは、何処へでも行けたわけではありません。年中行事に関係ある処なり、有名な場所へは何かの都合で行くことは出来たのです。ですから、いきおい何かする場合でも、その近くの場合がすぐ出て来てしまうのでしょう。まあ、経験する範囲は限られていたわけです。自分らには行けない、また直接関係のない場所の知識は、和歌集なり、物語なりを読んで、理解しなければならなかったのでしょう。

現在のわたしたちと比べて如何でしょうか。ロケットが月の世界にとどく時代です。しかし、誰でも行けるわけではありません。また、世界は飛行機の発達発展ですぐ行けるようにもなりました。地球は小さくなったとよく聞きます。多くの人もそう云います。でも、誰でも乗って行けるわけではありません、才能が必要です。それにお金もかかります。アメリカがどうの、イギリス、フランスがどうのと云って

も、其処へ行つて来たごく少数の人たちの話や、その地方のことを書いた本を読んで、知識を得ているのです。

テレビジョンが普及してから、それを眼で見ることができるようになりました。人間は眼を通して見ると確実にわかったように感じます。「百聞は一見にしかず」という諺があるほどです。広く見られるようになった現在のわたしたちと、狭い京都の中の一部でも、そこから直接感じられた昔の人たちと、どちらが幸せでしょうか。知識として持っているだけと、実際に感じるのと、如何でしょうか。現在も、昔にはない経験は沢山ありますが。

わたしのように、古い文学作品を読んでいる者にとっては、どちらとも云えないのです。今も昔も、その人その人の立場によって評価は違うものだと思います。

今までお話しして来ました女性は、あの有名な「枕草子」を書いた清少納言なのです。

文学博士 塚本善隆序
仏大講師 岸 覚勇著
定価 A5 判 二五〇〇円
送料 三八〇円
送料別 二五〇〇円

善導教學の研究

三重県四日市市六呂見町観音寺中

発行所 記主 禅師 鑽仰会

振替 名古屋 四〇一二番

東南アジア旅行記

佐藤 行 信

(大正大学講師)

出 発

私は昨年十一月十六日より、十二月十五日迄の一ヶ月、国際仏教文化交流協会主催の日本仏教徒仏跡巡拝親善使節団の一行に参加し、タイ、ビルマ、印度、パキスタンと旅行して来た。現在では多くの方々が海外旅行されており、今さら私の旅行記などと思っておったが、浄土の編集部の皆様にご依頼を受けた関係上、この一ヶ月の旅行中私なりに、見物し感じた印象を御報告して責任をはたしたいと思っている。

まず十一月十六日羽田発十二時三十分のエアインディア、飛行機はボーイング・ロールスロイス七〇七で最初の訪問国タイのバンコ

ックにむけ出発した。途中香港に一時間給油のため寄り、バンコックのドン・ムーアン空港に到着したのは、タイ時間で十八時十五分であった。日本とは二時間の時差があるから、日本時間にすると二十時十五分と云うことになる。

バンコックの空港に到着したときは、雨のあがったあとであったが、それでも暑い感じがした。我々は十四名の団体であり、それに旅行会社の日本旅行会から橋本さんと云う人が我々一行に同行しているため、入国の手続きを一括してやってくれるからすこぶる楽である。バンコックの空港も、羽田にくらべるとおそまつだ。これも我が国との経済力の差であろう。入国手続きに三十分程かかり、そ

れからバスで、バンコックの宿泊場所、トロカデロホテルに向った。空港はバンコックの中心街より三十二軒郊外にあり、バスで約一時間程かかった。このバスもよくみると日本のバス（いすゞ自動車のバス）である。そのうちよくみると、走っているタクシーは、ニッサンのブルーバードがだんぜん多い。我が国のお得意先である。中心街までの道路はよく整備されていた。ただ窓から入ってくる一種独特な香りにはまいった。中華料理の悪くなった時のような香りである。そのうち中心街、ニューロードに入ってくるときすが首都だけあり、なかなかりっぱな建物もある。しかし東京をみておる我々には、あまりおどろくようなことはない。そのうち、シェルと云う石油会社のビルの前を通った時、なかなかりっぱな事務所だと思つて窓からのぞいてみると日本航空の事務所である。この辺から、トヨタ、日産、ヒノ等の日本の自動車会社の広告や、サンヨウ等電機メーカーの広告それも日本の会社がだんぜん多い。そうこうみておるうちに、宿泊するトロカデロホテルに到着した。それから部屋をきめて貰うまでし

ばらくロビーで休み、部屋に入ったのが午後八時十五分（日本時間では十時十五分）であった。小生は愛知学院（名古屋）の鵜飼先生と同室であった。それから食堂において夕食である。相当お腹もすいてしまった。食事は洋食であるから口にあう。食堂で一番気分をよくしたことは、我々が入ると、ボーイが「上をむいて歩こう」のレコードをかけてくれた心づかいである。食事は一時間程かかったが、食後、我々一行の健康管理をして下さる竜谷大学の丹先生（薬学の先生）からマラリヤ予防の薬をいただき飲んだ。食事が終り部屋に帰ったら、もう九時半である。日本時間では十一時半、今朝六時に我が家で起床した私はすこし眠くなって来た。それから同室の鵜飼先生としばらく雑談し、シャワーを浴びてベッドに入ったのが十時半である。

十一月十七日

私は夜はよく眠る方たちで、なにも知らず眠ってしまったが、朝起きてみると蚊にさされたあとがある。あらためて丹先生のマラリヤ予防薬の有難さを感じた。同室の鵜飼先

生はもう起きていらして盛んに窓から町の風景をながめておられる。まだ六時半であるからあまり人は通らないが、たまに通る人を見ていると、やはり東洋人、なんと日本人に似ておることよ。きつとヨーロッパの人などみたら相異がつきにくいと思う。我々のホテルの前はアメリカの自動車会社高級車が置いてある。それから窓をあけてみると朝とはいえなかなかの暑さ、本日この暑さの中での市内見物は大変なことだろうと思った。朝食は八時にした。私は始めてパイヤを食べたが、スイカとメロンをミックスしたような味でありあまりおいしいとは思わなかった。

しかしさすが南国、朝の食卓にバナナ等果物が豊富である。

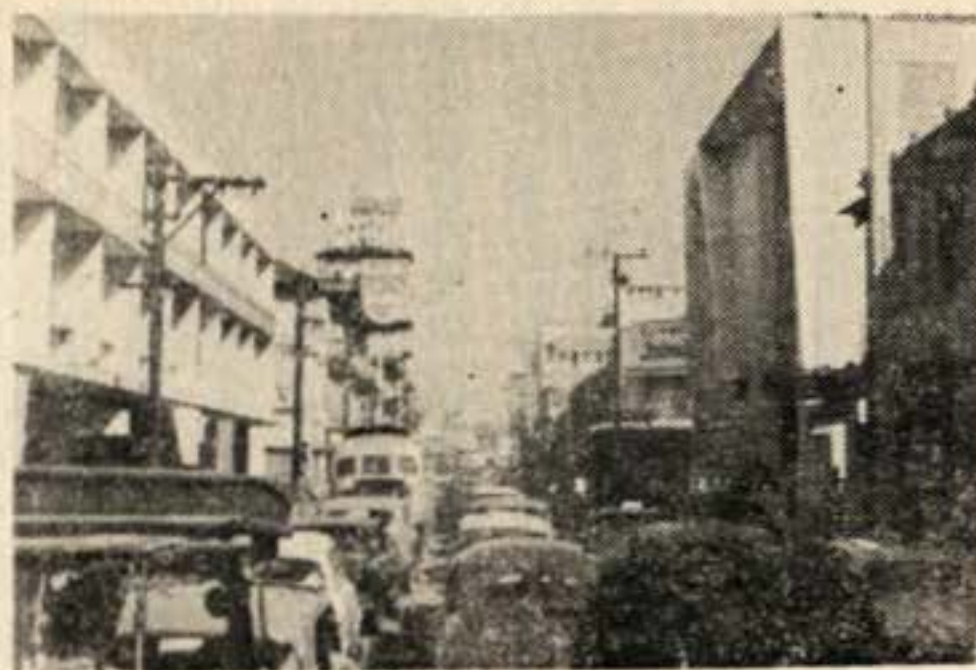
午前九時に観光バスがホテルまで迎えに来て、いよいよバンコックの市内見物である。最初に行ったところが、ゴールドテンブルと称する純金の仏像があるお寺である。バスの中で聞いた話しだと、バンコックは、人口二百六十万、その中二百万は中国系だそうである。バンコックは、寺院だけで約四

百程あり、寺のことをワットと云うそうである。タイの総人口二千五百万のうち、九割までが仏教徒で、一生寺で仏道修行する僧が二十万人もおり、その他に男子は大部分一生に一度数ヶ月寺に入って頭をまるめ、黄色の衣をまとい一切の欲をたつ仏道修行をするそうである。バンコックも中心街はなかなかの交通地獄でなかなか車が進行しない。最初に参詣した純金の仏像のある寺、ゴールドテンブルは、境内こそそんなに大きくはないが、純金の仏像をまつてあるお堂を始め、葬儀場等、お堂がなかなかまとまりよく建ててあ



（バンコック金の寺仏像）

った。純金の仏像は、まったくピカピカでし
ばし驚いてみいったが、私はお堂の内外の色
彩は、南の強烈な日光のもとでは、たしかに
美しいが、日本などで、この模倣をしてもだ
めではないかと思った。



(バンコック市内)

次にまたバスに乗り訪れたのが、ワットポ
ウである。このワットポウまで行く途中車
中で聞いた話であるが、仏教がタイでは如
何に影響しておるか云う事は、葬式は勿論

のこと、誕生、結婚、病氣と人生の始まりか
ら終りまでの他、商店の店開きにもお坊さん
にお経をあげて貰わないと商売が繁盛しない
と思っておるそうである。また学校の始業
式、卒業式、軍隊の宣誓式そして受刑者が刑
務所から社会に出るときもお坊さんが聖なる
水を振りかけ、前途を祝福するそうである。
そうこうするうちにワットポウについたが、
このワットポウは、王宮の南隣りにあるそう
で、これは王宮守護のため一七九三年に建立
された寺だそうである。タイの代表的な寺
で、この寺は有名な寝釈迦がある。この像の
身長は四十九米、小指の長さだけでも三米あ
るそうであるが、まったく大きな寝釈迦であ
った。タイの仏像をみての特徴は螺髪の中
心に突上っていることである。私がこの寺で
みた風景であるが、この寺ではお堂の中まで物
売りがしつこく売りに来、また、いかがわし
い品物まで売っていると云う事である。また
それをお坊さんがみてもとめようとしな
いことである。また案内人から聞いたことであ
るが、境内では寺の行事があるとき、射的か
らバクチ、ストリップショーまで庶民の娯楽

は全部やるそうである。これも中国系の人が
多い影響かしらんが、まったく感心出来ぬこ
とである。我々一行に法隆寺の高田さんと云
う人が団員に参加しておられたが、私は彼に
奈良の法隆寺に参詣すると如何にも日本人の
心の故郷と云う感があるが、タイのいままで
みて来た一つの寺には、お寺らしい清らかな
古さと静かさを感じずあまり私にはなじめぬ
感じがした。ただそこには、南国の日光のも
と、キラキラと光るあざやかな色彩だけが強
烈な印象となっていると話した。

次に我々が車の中からみたのは、グラ
ランドパレス(王宮)とその隣りにあるワット
ブラケオ(エメラルドの寺院)ここは王室の重
要な国家儀式を行う寺院である。このグラ
ランドパレスと、ワットブラケオは、中に入
ったわけではないが、外からみた感じは、な
かなかまとまりのある建物で、パレスを
囲む白壁と芝生がよく映り、私にはいま
までみた建物で一番よいと思った。そして
そのまわりが、一番清らかに感じた。

我々はタイの市内見物は午前中で終り、
午後ビルマに行くため、あまりたくさん見物出

来ないが、バンコックで最後の訪問地は、仏教大学の（チュラルコン、ラートラ、タイジヤライ）である。この大学は、タイ全国二万あると云われる寺からお坊さんが高等教育を受けに来ておる大学だそうで、タイの仏教教育機関の中心であるが、ここで案内人に聞いた話しだと、この地方から来たお坊さんが、なかなかバンコックをはなれたがらないそうである。その理由は、バンコックにおける生活程度が高いため、朝托鉢で貰う供物が、地方とは問題にならぬ程良いそうである。それに都市における方が勉強もしやすいし、それに地方におけるお坊さんもバス、タクシーに乗る生活にあこがれるそうでお坊さんの都市集中化が問題となりつつあるそうである。この大学で我々一行の団長木村先生より持参した薬とメッセイジを大学の当局者を通じ、恵まれぬ病の人に渡して貰うようお願いした。丁度昼食の時間で、信者がお坊さん方の食事のお世話していた。こちらのお坊さんは、十二時過ぎると食事が出来ぬから大変である。我々も用が終り次第早速ひきあげた。この大学の構内にも露店がたくさんたちならび、ちょ

っと日本ではみかけない大学の構内風景であった。バスでホテルに帰りかけ、ローヤル・バンコック・スポーツクラブ等の前を通った。又、帰りがけのバスの中で聞いた話であるが、バンコックのどの店も、店の奥に極彩色の祭壇があり、中国の道教の地主神さまがまつてあるそうである。この店に買い物客としてでなへ、店の主人の友人として訪問するものは、主人にあいさつする前にこの土地神を拝んで線香をあげるのが慣習になっておるそうである。これは、バンコックの商店の大部分は華僑であるためだそうである。この華僑の経済力は大したもので、バンコックの国立大学の学生の八割までが、中国系タイ人の子弟だそうである。我々は、そうこう話しておるうちにホテルにつきそれから昼食の後、午後一時半ラングーンにむかって出発した。

法然上人讃仰会新会員紹介

滋賀県伊香郡余呉村中河内	芳賀 信浄
横浜市磯子区岡村仲町一〇〇	鈴木彦次郎
奈良県天理市和爾町	竹田 英宣
横須賀市田浦二の四二	野中 省道
京都府熊野郡久美浜町一	紀氏 隆真
青森県上北郡野辺地町三五四	沼山 マサ
岡山県総社市福井	福武 房代
静岡県浜松市笠井町六の三	水野 愍道
新潟県南魚沼郡塩沢町	長 恩 寺
豊橋市野田町九七	菰田 ちか
見附市今町一、八三五	広河 素光
小田原市鴨宮四四六	春光 院
東京都北区中十条一の三〇	上野源一郎
東京都豊島区東長崎四の七	山川 トヨ
長野県更埴市大字森一、四五五	佐藤 公一
賀県藤津郡太良町大浦	正 伝 院
福井県敦賀市葉原 増福寺	花木 静子
神戸市長田区宮川町二の二	光 堂 寺
京都市伏見区竹田内畑町二七八	木村 正人

原田 靈道 先生

高橋 良和

(中外日報取締役)

浄土宗の庶務部長であり、その後東京小石川の淑徳女学校の校長となつて逝去した原田靈道先生はやさしい人であつた。

その頃の浄土宗は宗政面では一つに固まつて清和会という政党があり、長く渡辺海旭先生が執綱(今の宗務総長)であつた頃である。

原田先生は山口の生れであつて、京都の仏教専門学校から宗大にすすんだ秀才であつたが終始寺に入らず宗務所に入り、そして淑徳女学校長に就任したのである。丁度それは昭

和八年から十四までの七年間であるからそう長くはなかつた。

浄土宗の政治的な動きは一本に固まっていたとは申せ、関西と関東を結ぶ架橋が必要であつたから山口の人であるこの原田先生はいつも東海道を往復しては、その調整をやつたから実に円満にすすんだのである。

過去のことをいうのはおかしいが且つて浄土宗が二つに分れたときに、もしもこの原田先生がいたらこの分裂はなかつたろうとさえ思えるし、当時の里見内局なるものをもつともつと助けてもらえたのにと残念がった人もいたほどであつたが案外早く亡くなったものである。たしか急性肺炎じゃなかつたかと思うのである。

原田先生は上人というより先生といった方が似合うタイプであつてたしかに鼻の下にヒゲを貯えていたのが思い出される。

服装だつて、おおかたは着物であつて、洋服なども淑徳女学校の校長さんになつてから多く着るようになったのじやなかつたかとも考えるのであるが、それはある寒い日のことであつた

知恩院山内の古門前からかなり年をとつた和服のでっぱり太った人が赤ん坊をだきながらやってくるのである。粉

雪がちらつくような寒い日であったが、近よってみるとなんとそれは原田先生なのである。

「先生寒いですね、ええ赤ちゃんですか」

とたずねると、

「いや、えらいところを君にみつかったなあ。家内といっしょやったが一寸用たしに行ったあとこの子が乳を求めてなくもんやから、わしの乳をさわらせているのや」とぐいと子供をだいてみせたのである。

「ええお父さんですね」

「そういうなよ、えらいところをみつけれわしは頭があがらん」

とにっこり笑った原田先生である。實際あの人なつこい瞳の原田先生にして、はじめてやれることであって、この父親ぶりにはその当時独身であつたわたしの心を打ったのである。

この好々爺的性格の原田先生ならどの人とも和していける筈である。浄土宗のむつかしい動きのなかにあつて、陰に陽に渡辺内局を助けて浄土宗の宗政面羅針盤的役割を果たした功績がしのばれるのである。

原田先生は京都にも知己が多く、入洛すると家政女学校（今の家政学園）によくやってきたのである。

それというのも大島徹水僧正にも師事していたし、古い友人もたくさんあつたのでつい山口への帰り道には、京都に立ち寄つたのである。

わたしはまだ入社早々であつたけれど、先生からはよく「よしかずさん」と呼ばれた記憶があるので、なんだかわたしを吾が子のように可愛がってもらつたのおぼえてゐるが、それはもう三十年も前のことである。

当時の大島徹水僧正のもとへは同じ山口の上野法雄氏もよくやってきたが、大島僧正のところにくるとみんなそれぞれおせじのように両肌をぬいで語れるということの気安さであつたといえるので、原田先生にもそれと似た人柄があつたのは事実である。

その点ではまるでダルマのようなギョリとした眼をして一見おっかないような顔の原田先生にいうにいわれぬ童顔がひそんでいるのがとても他人の心を捕らえるのである。

一生寺に入らなかつたし、その上宗務の要路にあただけに決して生活だって豊かであつたとはいえぬのであるが、それを少しも口にせず清濁合せのんだようなこの風貌の原田先生のような人にはその後あまりめぐり合わないのが淋しいことである。

続 三部経の再発見 (1)



須藤隆仙

(函館称名寺執事)

アミダ信仰への異義

東洋大学の渡辺照宏という教授さんが、雑誌『大法輪』に、『アミダ信仰はどこで作られたか』という一文を発表して、だいぶ問題となりました。その大略は次のようなものでした。

①ドイツのエーデル教授は一九五九年刊『宗教—歴史と現在』の中で、アミダ信仰は仏教としては新奇な説であり、東アジアにおいて初めて一個の宗教として成立したという意味のことをいっているが、自分も賛成である。

②古代のインドにはアミダ仏や西方浄土に関する絵や彫刻が発見されておらず、インドに旅行したシナの僧侶も、それを見てきた人は一人もないから、アミダ仏信仰はインド在来のものではない。

③浄土三部経はインドで成立したものではなく、竜樹の十住毘婆娑論も、天親の往生論もインド真撰の書とはいえない。

④法蔵比丘修行のことは、無量寿経以外の經典には見ることができないから、他経によって傍証されてこない。

⑤「天竺国」は「天竺国」のことで、つまり東アジアからインドを西方仏国としてみたのがアミダ信仰である。

⑥浄土教の伝授伝法は、とぎれとぎれで、師資相統をするイ

ンド仏教は、禪宗や真言宗には伝えられているが、浄土教は異端である。

ざっとこんなものであります。これは渡辺教授のいわば一家言ですが、これによって純粹に念仏信仰を勵んでいる人に動揺などあらうはずはありません。しかしあまりにも教授の話が独断で、そのために新興宗教などが、これをよいことにして念仏信仰攻撃の材料に用うるようなことがあれば、お互に仏教を信ずるものとして不幸であります。

それで、この渡辺教授の説に対する、念仏者の信解を開陳してみたいと思います。

異義の正体

そのまえにまず、教授のこの説が学説として、どの程度の価値をもつものか、そのことを知っておきたいと思います。結論からいって、学説としてもあまり勝れたものではないようであります。

というのは、アミダ信仰に対するいろいろの批判は、ずいぶん早くからたくさんあったことで、たとえば浄土宗の学者だった矢吹慶輝博士の『阿弥陀仏の研究』の中に、たくさん紹介されてあります。その中にアイテル氏の説というのがあって、アイテル氏は、南方仏教ではアミダ仏の名を知らないとか、法顕や玄奘の如きインドに旅行したシナ僧の記録にア

ミダ仏のことがないとか、いろいろのことをあげて、アミダ仏の信仰はインド以外の土地で成立したもの、といっているのであります。しかもそれは、一八七〇年ころからアイテル氏が書物などに記していたもの、だそうであります。矢吹博士はこのアイテル氏の説は妥当なものではない、といつて、手ぎわよくこれを料理しております。

このようなわけで、渡辺教授の一家言は、なにもこと新しい学説でもなければ、前代未聞の新説でもないのであります。むしろ論旨の底に流れるものは、西洋風の研學にすっかりほれこんで、西洋の仏教学者の説に、一も二もなく追従しているようなふしが、かなり強く感ぜられるのであって、その意味では新しいというよりは、むしろ陳腐な学説であるといつてよいと思うのであります。かつて新史学的な論拠で親鸞聖人は史上の人物でないという、いわゆる親鸞抹殺論がでたことがあります。いまでは親鸞の實在が確められて、誰も抹殺論などを出す人はいません。それと同じにミダ信仰の否定も、まるで新しい問題のように錯覚されがちですが、じつは古くさい陳腐なものなのであります。それではつぎに順を追って、渡辺説の不当な面を指摘してみたいと思います。

仏教の根本

まずエーデル教授に同調して、アミダ信仰は新奇な説である、といって、まるで浄土教は仏教の正統からはずれるもののような口吻をしております。

この場合、『仏教の正統』とはなにか、ということが問題であります。渡辺氏はこの大法輪論以来、浄土系の学者二三の方と中外日報紙上で反論を重ねておりますが、大谷大学の舟橋一哉教授への反論の中で、仏教に共通する特色は、戒定慧の三学、ないしはこれを敷衍した六パーラミターあるいは十パーラミターであり、浄土教はこれに対して例外のものとなる、といっているのであります。パーラミターは御承知のように「波羅蜜多」で、六は施・戒・忍・進・定・慧で、これに方便・願・力・智を加えて十波羅蜜ですが、私はここで、仏教の本質を論ずる渡辺氏の根底にたいへん不備なものを感ずるのであります。

というのは三学とか波羅蜜とかいうものは、仏教徒としての、学すべき、行すべき、道法であります。いわば仏教というものが現成されていく道法として存在するものであって、この三学や波羅蜜だけが仏教の根本義であると考えるのは、たいへん危険な考え方であるからです。はっきりいえば、三学や波羅蜜は仏教の目的を達成する一つの手段であって、目

的ではありません。仏教の目的は、成仏する、仏になることであって、むしろ迷いを転じて悟りを開くという『転迷開悟』ということが仏教の根本義であり、大小乗を通じて仏教のもっとも特色とさるべきものは、この転迷開悟であります。渡辺氏は、仏教のこの最大特色を忘れて、三学・波羅蜜のみが仏教の特色であるとしております。決して間違ったことではありませんが、いやしくも仏教の特色を論ずるものとしては不備があります。たとえば、『恋愛』とは何か、という問題に答うる場合、ラブレターを書いたり、写真を交換したりするのが恋愛である、といったら、間違っていないくとも、たいへん不備なものとなります。渡辺氏の説はちょうどこのようなもので、三学や波羅蜜が仏教の特色で、浄土教は例外である、というのは、ラブレターや写真の交換が恋愛の特色で、相手を恋慕するのは例外である、といっているようなものであります。

このように渡辺氏は仏教の正統をすでに間違えて立論しているのですから、まことに滑稽になっていっているのであります。浄土教が例外なのではなく、渡辺氏またはエーデル教授らが仏教の担板漢なのであって、渡辺説はこういう重大な誤りを第一歩でおかしているのであります。

『転迷開悟』という言葉は、別に『転凡入聖』(凡を転じて

聖に入る」という言葉でもいわれているのであって、これこそ浄土教が問題とする『凡入報土』であって、浄土教はじつに仏教の正流としてあるのであります。この点について、一人私の言だけでは独断となりますので、東洋大学の学長さんだった高島峰先生の教示を記しますと、つぎの通りであります。

「仏教の教理が多岐多端に亘っているが、即ち大小権実、華天密禪等と別れ、その実践形式にも、自力あり他力あり、聖道門あり浄土門ありというように、沢山な宗派もそこから生れてきているのであるが、その根本に溯れば、ただ生死を解脱して、涅槃を得るというに外ならぬのであって、それが転迷開悟であり、往生浄土である」(同氏著『仏教とはどんなものか』)

紹介

法然上人鑽仰会々員であり東京作家クラブ会員である岡本薫氏は、自著「狂信創価学会を裁く」と題する小冊子を御送呈下さった。氏は長年光明主義念仏を實踐された信行の方であり、学会の矛盾及び弱点を指摘され、対創価学会の法を教唆されている。創価学会対策として一読される事をおすすめします。

東京都太田区桐里町四一

創価学会対策連盟

定価四〇円 七一〇円

表紙の解説

仏頭

マトウラ出土

首都デリーの南百キロほどの所に、かずかずの石彫芸術で名高いマトウラの町があります。すぐれた彫刻家たちは、すぐそれと判る黄斑のある赤砂岩を用いて、仏教、ヒンドゥー教、ジャイナ教のほとけたち、神々、更には当時一般の人々の生きていたそのままたの姿を、我々に伝え残しています。

時代的には、パールフットに続いてクシャン朝からグプタ朝にかけてが最盛期で、この町だけでなく北方、ガンジス河を越えた地方からも作品が発掘されており、その様式は五世紀のサールナート仏にも影響を与えていますが、他の地方と同様、ムスリムの侵略を受けて破壊され、多数の遺跡は、未だに地下に眠っているままの状態です。

この形式の仏像や菩薩像は、ガンダーラ仏との関係を云われたこともありましたが、現在では独立した流れとして見られ、初期のものは平らな薄い衣をつけ、グプタ時代のものとは薄く細いひだがいくえもの、美しい曲線を描いています。これらの仏像は側面から見ると左右のうで、ひざは決して一つの平面上にはなく、曲げられた手と共に立体的な動感を与えています。

仏像以外の彫刻で注目されるのは剣をもったカニシカ王の像や、ヤクシニーと呼ばれる女神の群像で、特に後者は古代インド文学に云う、マンガーの如き豊かな胸をもち、ミツ蜂の様な細い腰をもつ美女をそのまま表現して、見る人々を圧倒します。

佐藤 良純

大正大学

学 長 佐藤密雄博士

理事長 松本徳明博士

大正大学は、去年暮に、教授会全員一致で、鎌倉大仏住職、大正大学教授、仏教学部長の佐藤博士を、学長に推挙した。

今回は、又理事長に松本博士が推挙され、浄土宗が、大学運営の責任者として、両車輪を受け持つ事となった。誠にめでたいうことであるが、又責任重大である。新学長就任祝賀会は、東京と京都で盛大に行われ、特に東京では、一ツ橋の学士会館に、百三十余名の人々が参集し、祝賀した。先輩同僚に激励されたり、注文をつけられたりで、新学長は大変であった。それでも、「責任の重大さを感じ、精一杯やらせて頂きます」と、新学長はその抱負を語っておられた。

浄土合同宗会解散決議

合同後、両方の宗會議員で構成されてい

た浄土宗の宗議會も、去る三月十四日の議會席上で、早期に総選挙をするという決議案を議決した。これによって、合同後、いろいろの面での努力が為されていたが、政治の面でも新しい宗会ができて、本格的な新浄土造りが行われることになった。

仏教文化運動

仏教文化運動にもいろいろあるが、特に「現代仏教芸術院」(理事長、三井高陽氏)というのが、毎年三越デパートで、絵画、彫刻、工芸等を展覧し、仏教芸術を通して、民衆に訴えているのが注目されている。

今年は、十二月成道会を期として、大阪の三越で開催されるようで、特に全日仏の文化局も、その意義を認め、支援することとなった。又大阪に本部がある仏教文化協会(会長 橋本凝胤僧正)が、後援することになっている。現代仏教芸術院の運営の主な人々は、浄土宗の人々である。

仏教文化協会は、これとは別に、最近、仏教文化会館の設立を企画し、近くその発起人会が開かれることになっている。これを、仏教文化運動の中心センターとしようとするもので、仏教文化運動は、次第に新時代に即応した動きとして、盛んになりつつある。



(学長就任祝賀会)

空にはジェット機が飛び交い、陸には超特急列車が走らんとし、高速自動車道路には時速一〇〇キロで自動車が西に東に走り、地球の裏側と無線通信をする事が出来る高度に発達した物質文明の世界を謳歌するこの現代に、特急列車や自動車の運転席には交通安全の「お札」が下っている。この現代人達の中に生きている一見背反する精神生活と行為の現状を、日本民俗学会監事である著者が豊富な資料を駆使して、現代社会にいままだ生き続けている「迷信」の現状と今後の方向に就て非常に興味深く記述しているのが「現代の迷信」である。

今野 円輔 著
現代の迷信

「……美風と悪風との境界も、正しい信仰と迷信との境界も、容易に決定出来るものではないが、もっとも厳正と思われる科学の世界にも、真と偽との定かならぬものが、じつに多いのである。その科学が進めば、迷信が根絶するなど考えるのは、それもまたひとつの迷信というものである。科学教育を盛んとつて迷信を全滅しようなんて、あんまり思い上がった考えかたである。科学が進めば進むほど、迷信も発達して、打破しがたいものが生まれる。原子物理学が進歩しても遺伝学が発達しても、その成果を取り入れた迷信、その科学の根底を衝くような迷信が出てくる。」と

序章に「黒い習俗の日本」と題して、双生児母子心中事件、火あぶり事件等の迷信よりもたらされた現代日本の悲劇を紹介し、第一部として「現状」を語り「文明の谷間に生きる」の中に東京の雨乞い、表札どろぼう等の現実を語っている。第二部「過誤と真実」に前兆・卜占（うらない）・禁忌（タブー）・呪術（まじない）・祈願の中に「迷信」の現状と種々の姿をあらわ

現代教養文庫（三五五）
今野円輔著 「現代の迷信」

価 二〇〇、—

清高淡雅の文人

田能村竹田

林 左馬衛

(宮内庁・図書寮)

「渡辺蘆島は、任侠肌の人であった。人生をあきらめてしまつて、絵を学ぶようになったのは、何の故であつたろうか。呉偉之の蒼勁、通緊な画風を愛していたが、遂に遠方の師につくことをきめて、谷文晁の師匠北山寒巖の教えをこうた。貧乏だったから、絵を売っては暮していた。その夫人というのが、また、淡泊高雅な気性の人で、おどろくほど煎茶に明るかつた。訪れる客があると、茶瓶を洗うことを命じ、さて湯加減をと

とのえて対駁するのが常である。もちろん、他のことはすっかり忘れて、茶に没りこんでいる趣があつた。私は、たまたま、夜おそくなつて酒渴を覚え、先生の扉を叩いて茶をもとめたことがある。時は、もう十時に近かつたろうか。まだ寝をとられず、二階で月をみてみられたが、急にぶつぶつとつぶやかれたと思うと、私に詩を贈つて下さつた。昔の話をして喜ぶようになったんじゃ、隠者になつたみたいだねということであつた。私は、若い時、この老人と淵野樫園から、絵の手ほどきをうけたのである。」(山中人饒舌より)

田能村竹田が、茶という生活を真剣に横索するようになったのは、この渡辺蘆島という画家の人と生活に自分がいかに魅せられていたかを、自覚するようになったからだ——と思う。若いころの絵の先生だったくらいに思つていた、彼の考への輪郭が、いつのまにか変化して、気がついてみると、その生活態度だと思われるものにすっかり浸蝕されている自分を見出ださざるを得なかつた。

絵といわず、文といわず、詩といわず、書といわず、自分が長い人生の間に知ることを

得た師匠の数は、おびただしいものであつたような気がする。が、さてあらためて考えてみると、どうも、自分の受けついできた師匠の系統、これからも辿つてみたい心の系統は、蘆島先生のそれであつたらしい。

芸の世界というものは、まことに妙なもので、その師弟相承の系統なども、たんに天分だけによつてつくわけにはいかないものであるらしく、どうしても、体質的な要因が働いてしまふむきがある。いくらまじめにやってみても、それにはおのずから限度があり、知らないうちに系統からはみ出してしまう場合もある。どうも、特異な文化の質を伝えていかなければならない世界なものだから、その人の体と芸と両方から出てくる雰囲気、すべてが賭けられている面がある。それが自分の場合どうなのか——ということを考えると、有名な系譜上の人々は皆はずれてしまつて、ただ、蘆島先生だけが残つてくる。

たしかに、蘆島先生は、知る人も少い地方文化人の一人であつたに過ぎない。あまり有名にならない中に、歴史の片隅に追いやられていたような、影の淋しい偉人である。だが、

その人柄の中に、画家にとってかけがえないと思われる大切ななにかが、潜んでいなかったろうか。自分が涯の世界で実現してゆきたいものなどは、全部、その生絵の中にふくまれてしまっていたような気がする。

田能村竹田が、その豊かな才能をもてあまし、およそ文人とみなされるために必要なあらゆる道、詩・書・画のすべてにわたって、そのいずれの正統もつぎえない中途半端な自分を見出したとき、迎えにきたものが、蓬島先生の記憶であり、茶であった。

竹田が、それまでの日本になかった、文人の文化の上に輝くようになるまでには、彼は、彼なりに追いこまれた、心の歴史を持つ必要があった。その、追いこまれた心の影に、彼は、趣味という世界の哀しさを知った。

もう、この哀しさの中に生きる以外に術がないというところまでさがってひいた線だったから、自然、彼の生き方に、説得力がでてきたのだ、と考えてよいかと思う。あらゆる文化の果に趣味性を、趣味性の果に茶をおいた人物として、田能村竹田ほどの巨大な人間像を、ほくらは、知ることを得ない。

竹田の趣味の見事さは、当代一流の学者を納得させた、趣味の質の高さにある、と思われる。頼山陽しかり、広瀬淡窓・旭窓兄弟しかり、篠崎小竹しかりであった。彼自身が、漢文学の世界に供した填詞図譜というベストセラーも、また、彼の信ずる生活文化を飾る特異な作品であった。

竹田の茶は、当然のことながら、この高い趣味生活を全うするために必要な、交友関係の茶であった。あらゆる文化を、茶に導入することができる、豊かな人間関係こそ、彼のめざした努力目標である。そして、彼は、その関係の中に生きる自分を見出したとき、自分なりにふさわしい、全うしたかったものを全うしえたような気がした、のであった。

彼がその根柢にすえた茶は、日本で比較的历史らしさの浅かった「煎茶」であった。自由な立場から提案してゆくことが、彼の立場をつくるために、必要であったからだ。それは、マイナスの札ばかり集めて自由を生み出してゆく、彼の生き方にそって撰ばれるにふさわしい世界であったようだ。

田能村竹田の交友関係の中には、いままで

歴史に登録されることのなかった世界の文化人が、数多く含まれていた。そして、彼らの参加なくしては成り立ちえない、新しい文化園が結成されていた。竹田の文化史上の業績の中で、こうした新しい文化基盤の醸成ともいうべき仕事は、とくに注目されなければならぬのではなからうか。

竹田の実現した文化は、こうした新しい基盤に支えられて打ち出された、新しい論理をひめる文化であった。竹田の文化にふれる場合、その影の論理をみつめてゆくことが、大切であるように思われてならない。

「竹田莊師友画録」のごとき作品は、その新しい論理をみつめ描き出してゆこうとする意欲をもちこんだ、見事な文学作品である、ということができる。その文化の基盤から、その最上の結晶としての文学にいたるまで、竹田のみつめえた論理は、一貫して深く透っている。その一貫性の果に、彼の茶があった、というべきなのであろう。

往生した人々

牧田 諦 亮

(京都大学人文科学研究所員・文博)

(一)

浄土教の最高最終の目的、到達すべき場所が、阿弥陀仏のまします西方浄土に生まれること、往生にあることはいうまでもない。今日では、どうにも身のおきどころがなく閉口したことをも「今日は自動車のラッシュでにっちもさっちも行かず、往生した」とか、「高速道路で車の故障のため立往生した」などと、俗に用いられている往生の、原初的な意義については、古来、各宗各派によって、その解釈に相異のあることはよく知られている。その解釈をめぐって同じ浄土宗の間でも宗義学者の間に重要な問題として論争の対象とされたことは、いまさら述べるまでもないことである。しかし、今日、私が往生について感ずることは、そのような先匠の巧妙な往生についての宗義上の論争点についてとやかく言うので

はなく、いったい中国上代の仏教徒たちが往生の境地に達するため、いかに実践したかということである。

往生とは、字の通り、(此から)往いて(彼に)生まれることである。ある方へ向って生まれる、それが往生であることは、きわめて定義的な解釈である。それは、迷いのこの岸から、悟りの彼の岸に往いて生まれるともいわれる。

私たち浄土宗徒にとっての往生の解釈は、法然上人が「往生要集釈」に、

往生というは此を捨てて彼に往き、蓮華に化生するなり、草庵に目を瞑ぐの間、蓮台に跏を結ぶの程、すなわち弥陀仏の後より、菩薩衆の中に在って、一念の頃に西方極樂世界に往生す。

と記されているように、最後臨終の時、人間的な生命の終り

から、超人間的な生命の初めへと、その在り場所を転換することを使うのである。このわずらわしいもろもろの人間的な制約のある娑婆世界から、煩惱のけがれなやみから離脱した、彼の阿弥陀仏のまします、真実の樂みのみちみちた仏の国土へ生まれかわることが往生である。浄土宗徒にとって、往生とはあくまで最後臨終ののちに来る新しい世界への生まれかわりである。しかし、有限の世界から無限の世界への転換ということは、口に言い、筆に記すことはかんたんであっても、私の生涯にあてはめて「往生」を考えとおすときは、決してたやすいことではない。当然、身体も精神もが健康であり、正常である時からの、迷いの此の岸から悟りの彼岸への転換が、行なわれていてこそ、行う努力がはらわれていてこそ、最後臨終の時、草庵に目を瞑ぎ、蓮台に跏を結ぶような瞬時の短い時間に、西方浄土に往生することの可能性が保証されると私は信ずる。もちろん、このような理解については、当然いわゆる宗義上の安心にさしさわりのあるものであろう。十悪五逆の罪を犯すような私どもにとって、健康な身体、正常な精神の時に、すでに迷いの此の岸から悟りの彼岸への転換（往生）が行なわれているなどということ、浄土教の立場からは全く考えられない、聖道門的な、さかしい量見であるとして非難されるのであろう。しかもなお

それは、道綽大師も言われた、一生造罪の下品の私が、そのままでは到底解脱することのできぬ凡夫ではあるが、最後臨終の一唱称念、南無阿弥陀仏と唱えることによって、阿弥陀仏の極樂国土に往生できるとの心の安らぎを得るとの決定感によって支持されているのである。

寺とは名ばかりの、それでも名だけは念仏寺という立派な寺号を持った自坊で、私は檀家の老人たちで構成している念仏講や尼講の会合を月に二回は必ず持っている。おつとめ、法話のあと、食事をともにしながら、いろいろな世間話や、家庭の内輪話や、あと定石通りにいっても数年か十数年の余命しか持ち得ない、今の不安や、また孫に嫁をもらった喜びをふくめたささやかな家族構成にみちたりた、今の満足、その満足から来る極樂往生への期往などについて、しみじみと語るのはこの時である。

主人が流行性感冒で急死した時、奥さんは三十五才、長男はまだ十二才であった。その時はほんとうに子供ともども自殺したいとまで思いつめたそのおときさんは、それでもようやく思いとどまって、つらい百姓仕事に精を出して傾きかけた家をささえて、とうとう四十二年。去年は孫娘を嫁に出し、此の春には孫息子に嫁がきて、一家はおめでたつづき。数日まえに、私にその喜びをしみじみと語ってくれた。「ほ

んとうに阿弥陀様のおかげです、御先祖様のおかげです、この上にもう一年長生きさせてもらって、内の曾孫の顔が見てから死にたいと思っています、それでも、この望みがかなえられなくても思い残すことはありません、おつさん（和尚）のいつも言われるように、元氣にものの申せる間からお念仏をつんでゆけたら、これ以上のしあわせはありません」

自分の感情を偽わることを知らない八十近いおときさんの、この言葉を聞いてほんとうに悟りきった仏の境地にもあるかのように思われる老婆の、極楽往生の姿をまざまざと見せつけられる思いがし、偽わることの多い私の日常に、地獄一定すみかなりの深い反省を感じたのである。それとともに、上代中国の浄土教信仰者の生涯を描いた多くの往生伝の中に記された、自分の信念に生き、浄土教の信仰に生涯を終えた人々の日常生活も、おそらくはこのような学解や分別を超越して、ただひたすらに阿弥陀仏を信じ、仏の御名を唱えて、一日一日をみちたりた法悦の中にすごし得たものではなかったろうか、またこれこそが往生浄土の実際の姿ではなかったらうかと、往生伝の人々を思い浮べたのである。

(二)

もちろん、周知のように、中国における浄土教信仰の隆盛は、道綽大師を経て、善導大師の教化のさかんに行なわれた

隋、唐以後である。善導大師の浄土教はそのまま約六百年あとの日本の法然上人によって、「偏依善導」とうけつがれて、今日の浄土宗となった。この善導大師以後の中国浄土教は、とくに社会構成のほとんどを占める庶民階層の中に多く信じられて、その隆昌を今日に伝えているのである。浄土往生の伝記をあつめた往生伝も数多く今日に残されているが、それらのほとんどは善導大師以後の撰述になるものである。元朝時代には、観音信仰全盛の影響を受けて、観音靈驗記といったものがいくつも流传するにいたった。このほか「金剛般若経集驗記」とか、法華経信仰の靈驗をあつめた弘贊法華伝記とかの類書も見出だされる。念仏往生人の事蹟を集録した往生伝も、これらの影響を受けて、念仏往生人の行蹟を平易に叙述することによって、より多くの同信を得人としてとめたものである。

唐の道綽大師（五六二——六四五）の著した「安樂集」をまねて、ほとんど同時代の迦才が貞観の末年頃「六二七——六四九」までに撰述したと思われる「浄土論」には上古の慧遠法師や謝靈運らはみな西方極楽往生を期しはしたが、結局は我が身一人を善くしようとしたにすぎない、近頃の道綽大師は、広く衆経を引用して、浄土往生の道理をのべはしたが、まだその文義が混雑し、内容は混淆して、後の読む者を

して浄土往生の決心を躊躇せしめるものがあるとして、この書三巻を撰述したことを記している。その第六、現得往生人想貌の頃には、日頃の信念称名の実践によって、めでたい往生浄土の宿願を達した人人の伝記が記されている。すでに道綽大師の「安樂集」には、菩提流支三蔵以下の六人の大徳の僧の往生の姿が描き出されているのであるが、迦才は、これを承けて、僧侶比丘尼のほかに、さらに浄土教の信仰に生き、在家者の往生の実相を伝えて、往生浄土信仰者の精進を期待しているのである。これは、のらの往生伝の先驅をなしたもので、ようやく浄土教がさかんになろうとした唐の初め、今から千三百年も以前の頃の、中国浄土教の実践を今日に伝えたものとして、すこぶる珍重すべきものである。

(三)

道綽大師を、迦才はその「浄土論」巻下に伝記して次のように言っている。

曇鸞大師以来、并州（山西省）の地には阿弥陀仏名を専念して浄土往生を期する人は多いが、道綽もやはり并州の人で、曇鸞大師より三世の法孫にあたる。いつも、曇鸞大師の智徳の高遠なことを讃歎し、風愚の自分と相去ることほど遠い、達識の曇鸞大師さへが講説をすてて浄土の業を修して遂に阿弥陀仏国に往生されたことに思いいたって、いささかの

智慧才覚は何の足しにもならないと悟って、道綽大師自身も学解、講説のことを棄てて、大業五年（六〇九）四十八才の年からはもっぱら浄土の業を修め、ひたすらに、阿弥陀仏名を念じて礼拝供養しつづけた。貞観（六二七——）以来は有縁の人々のためにいつも観無量寿経を講義して、晋陽、太原、汶水三県の僧俗に浄土往生の要義を示しおしえたのである。また念仏の多数を勧めて、小豆念仏とて、八十石、九十石の念仏をしとげた者を上精進、五十石の小豆念仏をとげた者を中精進、二十石の小豆念仏をしとげた者を下精進というなど、庶民教化に徹した道綽大師の事蹟を述べたあとに、貞観十九年（六四五）四月二十八日石壁玄中寺において多くの信者達に見まもられながら往生の奇瑞を示したことが、深い感激をもって記されている。

「安樂集」には菩提流支三蔵や曇鸞大師など六大徳の往生を挙げているのに、迦才の「浄土論」では、ただ曇鸞大師のみを挙げ、しかも近郷近在の在俗の弟子や寺内の出家の弟子など数百人に見とられて浄土往生をとげたことを中心として記されているのみである。この迦才の「浄土論」に示している現に往生を得た人々の中に曇鸞、道綽その他の諸法師を挙げているのは、深い学殖を内に湛えながらも、浄土教の祖師というよりは、庶民の信仰に親しみぶかい事蹟をもった人々

としてこれらの祖師たちを選んだのであろう。浄土教徒にとっては、智慧才覚よりも、まず念仏称名を實踐して、日々に往生浄土の行業をつみかさねてゆくことが肝要であることを示したのであろう。

張元祥という人は陝西省万年県の人である。その性質は純朴ですなおであり、平素から五戒を保ち、いつも観無量寿經を誦し阿弥陀仏名をとなえることをもって、日々のつとめとされていた。去る開皇二十年（六〇〇）五月に病を得、六月三日辰の時にいたって、にわかには食を求め食べおわって正念往生した。二日を経て遺骸を葬所に送ったが、顔色など生きているときと少しも異ならなかった。人々は皆その不思議に感歎しないものはなかった。おそらく平素念仏の行業につとめたその善業力がそうさせたものであろう。

姓名は識らないが、一人の狩人がいた。その性質は兇暴で陰險であり、因果の法（仏法）を信ぜず、殺生を事としていた。たまたま病氣を得て、もはやもとの元氣さに戻ることができず、しかもつぶさに地獄の責め具を見、かつて殺した獣たちが彼の罪の償いを求めてきたのを夢見た。彼はついに懺悔の心をおこした。「私は平素、師僧の語を信じなかったが、今日夢に見た地獄の様子まさにお経に説いてある通りだった。」ついに懺悔して、家人に救いを求めたので、家人は

大急ぎで寺に行き、僧侶を呼んで話をきいてもらうことにした。

「どうか救けて下さい、貴方の弟子にして下さい。」

「貴方は平素から仏法を信ぜず、いま臨終にのぞんで救けてくれといっても、何とも救いようがないのではないか。」

「まことにその通りで、申し開きようがありません。しかし、貴方はお経をよく読んでおられるが、私のような罪人でも臨終に救って頂けるような方法はないものでしょうか。」

「その方法は観無量寿經にいう、五逆十惡の不善業の下品下生のものも、一念の念仏でもってそのまま往生を得るとの説があつて必ず救われる。」

「それなら私のような罪惡深量の者も必ず往生させて頂けるに違いありません。」

死に瀕した狩人は、家人を呼んで香炉を持って来させ、香を薫じ、左手をその中に入れて自ら我が手を燃えさせて地獄の相を現じ、右手に香を握り、顔は西方浄土の方に向つて、至心に念仏して未だ十念に満たないうちに阿弥陀様のお迎えがあつたと言いつつ往生した。これが十念往生というものである。

この迦才の「浄土論」には、合計して三十一人の往生の姿がえがきだされている。そのいずれもが、庶民の信仰にふさ

わしい日常生活での称名念仏のつまかさねのうちに、西方浄土への往生を遂げているのである。その上、たとい、五逆十惡の殺生人であっても、発心して念仏し、臨終の十念にさえ満たなくとも、心から西方を願生うれば、八十億劫生死の罪を滅して極楽世界に往生し得ると説くところに、悪人救済に徹底した中国浄土教の根本義ともいうべき重要な觀無量寿經の經説が、大きく庶民の上にうかびあがってくるのである。

読者通信

南無阿弥陀仏 私は浄土宗末端の寺の住職です。老師の遷化に伴い二足のワラジをぬいで経済的に弊れた寺の経営に専念し、「浄土」の読者としてここに三年、五十才をすぎて宗祖の仰せのままに念仏に過す毎日です。この様な御手紙を差しあぐる御無礼お許し下さい。「浄土」の為に敢てお願い致します。

(一) 岸覚勇師「浄土宗義史」を紹介された文中「附録の座談会は各祖師方の御考がよく出ていて面白いが、この本の性格から申せば聖聰上人の浄土教で終りにしておいた方がよりすっきりしたものだのではなからうか」とありました。が、私共愚鈍のものにとってはそれがあつたから有難いのです。座談会を読んで又本文を読み直す私共です。岸師は往生

についての座談会を親切心から附録したのではないかと思います。

(二) 田村教授の「法然上人と現代」の中に宗教の世界と道徳の世界は次元を異にしている。現代に対応する指導原理を宗教の世界に求むる事は見当ちがいである。云云。といい、「現世をすぐべき様は念仏の申されん様にすぐべし」と云う法然上人のお言葉は、実は究極の境地をあらわしているように思われる。もしこのお言葉通り行うとならば、私には不可能であると告白せざるを得ません。私はこの宗祖のお言葉は浄土宗の看板ではないかと思ひます。又、貴著「法然」の一枚起請文の意識の中に「この外に奥深い義理を知ろうとするならば、二仏の御憐みにはずれた本願の救いからもれるであらう」とありますが、私共が拝承している伝統的な理解と異なります。これは宗祖が二尊に誓ったお言葉でないでしょうか。

(三) 山本空外師「念仏の利益」は念仏の現益を実証したことで渴仰措く能わざるところですが、最後に「称名念仏の心理と論理」というお言葉がありました。が、声の称名により、名を称することにより滅罪生善することの「心理と論理」について山本師にお尋ねしたいのです。このことについて師は蘊蓄を持っていられる様に拝しますから。 草々

行橋市今井一八二三

増谷雄鳳

御法語をいただく

およそ五種の嘉誉をつたへ、二尊の影護をかうむる。これはこれ現益なり。また浄土に往生して、乃至成仏す。これは是当益なり。(選択本願念仏集)

「念仏を唱える人は、人中の白蓮華であり、観音勢至の二菩薩がその勝友となる」とは、釈尊が観經の最後において念仏行者を賞めた言葉であります。この句について善導大師は更に詳しく説明されました。

「お念仏を唱える人は、花に喩えるなら白蓮華であつて、氣品が高く美しく、常に珍重されている。また人というなら稀にみる最勝の人である。そしてお念仏を唱える人には観音勢至の二菩薩が影の形にそう如く常に離れず護っていて下され、かつ親友知識ともなつて下される」

そして最勝の人ということをや五通りの言葉で形容されました。このことを法然上人は五種の嘉誉をつたへるといわれました。その上に二尊の影護まで受けているの

は、念仏者が現世に受けている利益であるということです。そして浄土に往生できるということは未来にわたる利益であると申されました。

ここでは慈悲の観音、智慧の勢至両菩薩の御名だけを挙げていますが、実は十方の諸仏諸菩薩がこぞつて念仏者を護っていて下さいます。そのおかげによつて念仏者には不慮の災難を受けることがありません。たとえ悪鬼悪神どもが災禍を加え、惡道に誘わんといかに努めても、念仏者に対しては乗ずる隙を見出すことができません。法然上人は念仏者の現世に受けている利益として「横さまなるわづらひなし」といわれました。これは酒色のために身体を壊すとか溺死や毒藥死することがないということであります。

ただし念仏者が病氣にならぬということではありません。病氣になるのはそれだけの原因が集つたからです。この原因を取り除く努力をしないで、ただ神仏に祈つたり

物忌みしたりしたところで病氣は治りません。

「いのるによりて、やまひもやみ、いのちのぶる事あらば、たれかは一人として病み死ぬる人あらん」

薬よりも祈禱の方が重んぜられた時代にあつて、法然上人はこう申されました。

阿彌陀さまの光明は無量であるばかりでなく、どこまでも徹照いたします。この光明に攝取されるのは、臨終の時ばかりでなく平生の時からあります。

「阿彌陀仏は八万四千の光明をはなちててらし給ふ也。平生の時てらしはじめて、最後まで捨給はぬなり、かるが故に不捨の誓約と申す也」

このように平生から光明に攝取されるのはお念仏の現世における利益であります。それが直ちに永遠の大生命と結びついているところに大切な意味があります。念仏者に現当二世の利益があるということは、たしかに現世と未来との両方に利益があるということです。この両者はけつして別々にあるものでありません。

(村瀬秀雄)

村瀬 秀雄 著

一枚起請文をめぐって

新書版一〇二頁・写真版二葉
価 一二〇円・(送 三〇円)

目次……一枚起請文とは……観念の念仏を排す……

聖道はあり得ない……信仰の目標……本願念仏を
申す……ひらに信ずる……すべてを包含する……
二尊の前に誓う……只一向に念仏すべし……御遺
訓にはげむ……二相承の合流……ご法語索引

信徒必携の奥義書

ご法語一〇〇句を収録

発行人

法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田町一の二一
振替 東京 八二一八七番

編集後記

▽伊藤宏天先生は、編集子
にとっては、恩師ですが、
こうして法話を拜読すると
今更の様になつかしさを感
じます。味読願います。
▽京の春も訪ねてみました
が、観光客で一杯でした。
葵祭は、この古都の風物誌
です。榊先生に、そんな所
を、ねらって頂きました。
▽中外の高橋良和先生から
は、一向に浄土は編集が下
手だ、とお叱りを受けまし
た。まあそう言わずに原稿
をとということ、うまく頼
み込みましたので、お楽し
み下さい。
▽三月号から、当間寿海氏
に、編集を協力して頂いて
ます。大正大学の大学院を
出られた新進です。新しい
企画も、又出てくると思い
ます。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 五月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十九年四月廿五日 印刷

昭和三十九年五月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
会社

発行所 法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田町一ノ廿一
電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

宗教科教育の好テキスト

マレット著

竹中信常訳

A5版 二二三〇頁
定価 八五〇円
送料 一〇〇円

(但し都内は五〇円)

宗教と呪術

——比較宗教学入門——

人間存在の根底に横たわる「宗教と呪術」の問題を解明し、宗教の真実の在り方を鮮明した宗教学の名著を、訳者十数年の刻身のほん訳。

東京都文京区大塚窪町二四

発行所 誠信書房

振・東京・一〇二九五

日本一の生産・設備

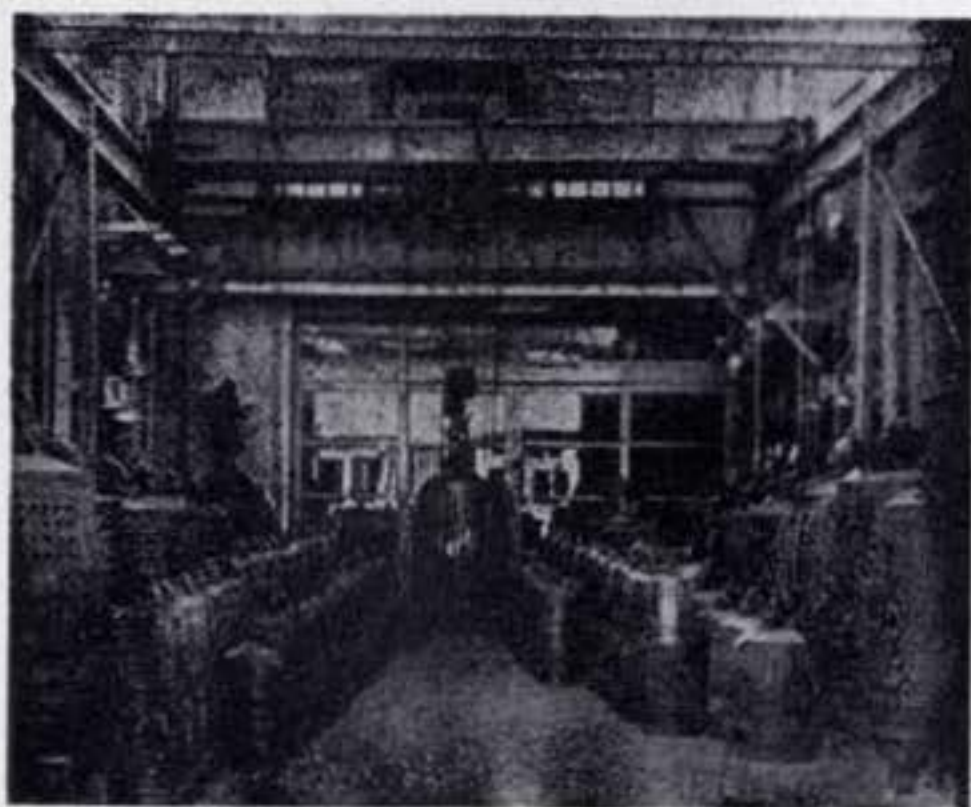
梵鐘 (15cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響 理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



鋳物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 040 8847番 本社工場 高岡市横田